北九州市立文学館紀要
第５号

【資料紹介】

宗左近〈縄文〉ノート解題・翻刻（1）…… 稲田大貴　3
小野芳美

寄贈資料　2021年度 …… 10

2023年3月

北九州市立文学館

北九州市立文学館紀要
第５号

2023年3月

北九州市立文学館

【資料紹介】宗左近〈縄文〉ノート 解題・翻刻(1)

稲田 大貴
小野 芳美

本稿では宗左近（一九一九～二〇〇六）の詩集『縄文』（思潮社、一九七八・一一）の創作ノート三冊を紹介する。本資料は二〇一〇年八月、宗左近夫人・宗香氏より一括で当館に寄贈された約一万点の資料群中のものである。

今回、翻刻の対象とするノートは、「縄文 長篇詩ノート」、「縄文から続縄文へ」、「三善晃氏に捧げる縄文」と題される三冊で、『縄文』については一九七六年五月から、脱稿し入稿した一九七八年七月までの記述がある。本資料中、「縄文 長篇詩ノート」は二〇一四年一〇月に開催した当館特別企画展「宙のかけらたち―詩人・宗左近―」展で公開。また「縄文から続縄文へ」は同年三月に開室した戸畑図書館内宗左近記念室で公開。「三善晃氏に捧げる縄文」については、これまでに展覧会での公開はなされていない。

『縄文』は宗左近一四冊目の詩集である。以降、宗は『螺旋上昇』（思潮社、一九九七・三）まで〈縄文シリーズ〉と呼ばれる詩作群を三期にわたる一九年間で全一八冊を刊行した。ライフワークともいえるこの作品群は、宗の詩業において中心的な位置を占めており、その始めである『縄文』生成の経緯を示すこの三冊の創作ノートは、宗左近研究において極めて重要な位置を占める。

三冊のノートについての概略を述べる。まず、これらは時系列、内容的に整ったものではない。例えば「三善晃氏に捧げる縄文」は、冒頭から二八頁までは、「詩集『戦争』」、「小説『若年』」についての記載があり、それぞれ一九七五年七月、一九七六年一月に書かれたものである。それから空白頁を挟み、『縄文』について書かれるが、脱稿間近の一九七八年七月から始まり、脱稿、入稿の経緯が書かれる。そしてその後の頁に一九七七年六月一八日の日付のものが書かれる。このように時系列、内容が錯綜しているため、本稿で

は、記載されている日付、内容を踏まえ、「縄文 長篇詩ノート」、「縄文から続縄文へ」、「三善晃氏に捧げる縄文」の順で翻刻、紹介してゆく。なお、本解題および「縄文 長篇詩ノート」の翻刻は主に稲田が、「縄文から続縄文へ」、「三善晃氏に捧げる縄文」の翻刻は主に小野が担当する。本稿では「縄文 長篇詩ノート」の翻刻を掲載し、「縄文から続縄文へ」と「三善晃氏に捧げる縄文」の翻刻は次稿以降、掲載する。

始めに「縄文 長篇詩ノート」については、表紙に「1976・5・26」と日付の記載があり、二頁目に「A」構想／まだ、何もない。」と書かれており、この時点ではタイトル以外、作品の構想が立っていないことがわかり[1]、順序的には一冊目にあたる。ノートは、日本ノート株式会社製、アピカノート。体裁は六号（セミB5、179㎜×252㎜）、八〇枚。

本資料からは『縄文』を天地創造の神話として作り上げること、また峰岸啓三をはじめとする、宗の亡くなった友人を書くことが初めの構想からあったことがわかる。また、アイヌ民族の叙事詩である「ユーカラを読むこと」という記述もあり、この点から『縄文』を読み解くことも考えられる。

また最後の方の一五〇～一五二頁は、『縄文』の仕上げと、その続刊として「新縄文」への言及がなされており、一九七八年の記述と推定される。

次に二冊目の「縄文から続縄文へ」は、表紙に一九七七年の八月二八日と、二月一八日の二つの日付が記されている。一二頁までは『縄文』および続編となる『続縄文』（思潮社、一九八〇・一一）の構想、スケジュールが記されており、こちらは一九七七年八月二八日の記述である。二〇頁には「詩集〝縄文〟のためのノートの続き／（1977年2月19日）」とあることから、ここからが「縄文 長篇詩ノート」からの続きと考えられる。ノートはマルゴノート株式会社製、マルゴノート。体裁はB5版、182㎜×257㎜）、一〇〇枚。

三頁目には「77年2月27日から少くとも10月31日までは、〝戦没学生〟と〝一高〟と〝縄文〟とに集中しなければならぬ。今年は正念場だ。」という記述がある。一見すると、この時期に抱えていた仕事について述べたものにしか見えない。しかし『縄文』の執筆時

期と、作中に書かれる戦争で死んだ友人たちを考えると、「〝戦没学生〟と〝一高〟と〝縄文〟」の三つの繋がりが見える。峰岸はじめ宗の友人たちは旧制第一高等学校の出身であり、「一高」の「戦没学生」である。しかしここでの「戦没学生」は峰岸らではない。宗は一九七七年八月、野見山暁治、安田武とともに『祈りの画集 戦没画学生の記録』（日本放送出版協会）を刊行する。これは一九七四年九月四日、ＮＨＫで放送された番組「祈りの画集」（宗も出演）を発展させる目的で宗らに調査依頼された成果の一つである[2]。ここでの「〝戦没学生〟」はそのことを指す。この一文により、戦没画学生に関する仕事と『縄文』とが接続され、その地点からの読みが可能になる。

また一一五頁には『縄文』の冒頭の詩「きみたちが殺されなければ／縄文／などありはしなかったのだ／わたしの雲よ」の原型となったと考えられる一文、「きみたちが殺されなければ／縄文などなかったのだ」が記されている。ここで注意を払っておきたいのは、前頁で繰り返し「なぜ縄文か」を問うていることである。この問いに答えるかたちで導かれた一文であることは、『縄文』の成立を考える上で非常に重要な要素であろう。

三冊目の「三善晃氏に捧げる縄文」は先に述べたように、「詩集『戦争』」、「小説『若年』」の構想メモが記され、書かれた時期としては三冊のなかで最も早い。しかし『縄文』については、脱稿、入稿時期のもので三冊のなかで最も遅く書かれたものである。ノートはツバメノート株式会社製、ツバメノート。体裁はセミＢ５版（１７９㎜×２５２㎜）、五〇枚。

表題の通り、『縄文』は作曲家の三善晃に渡される。一九七八年七月一五日のことである。この時点では清書原稿であったと推定される。この詩を用いて、三善は一九七九年「混声合唱と管弦楽のための詩篇」[3]を発表。それに先んじて一九七八年一一月に詩集としての『縄文』が刊行されている。

三善からの依頼がいつであったかは判然としない。「縄文から続縄文へ」の二〇頁には一九七八年二月一一日の記述として「三善晃さんの音楽のために／3月10日から集中するぞ。」とあり、これ以前ではあるだろう。しかし、「縄文 長篇詩ノート」の途中に

合唱曲を想定しているような記述がわずかにあるものの、三善の名はなく、『縄文』が初めから三善の依頼で構想されたとは考えにくい。この点に関しては今後の調査が待たれる。

五二頁には一九七八年三月二一日、東京混声合唱団による三善晃のコンサートを聞いたことが記され、これ以降、合唱曲のための詩を強く意識した書き方となっている。前の二冊に比して、一気に完成稿に近い文となっていることから、『縄文』の完成にあたり、三善晃合唱曲のための詩であることが重要な要素であったことが窺える。

以上のように、『縄文』の三冊の創作ノートは『縄文』ひいては〈縄文シリーズ〉全体を繙くために不可欠な資料である。

（いなだ　だいき　学芸員）

【注記】

(1) 二頁目には「76年5月20日か」と書かれているが、これは後に加筆された誤記と推定される。

(2) この経緯については『祈りの画集 戦没画学生の記録』の「あとがき」に詳しい。番組終了後、宗、野見山、安田に調査が依頼され、一九七五年は戦没画学生の遺族、遺作を探す調査に費やされ、七六年八月から遺族の取材に赴いたとされる。また刊行直後の一九七七年八月一五日にはＮＨＫで「空白のカンバス〜戦没画学生の記録〜」が放送された。

(3) 初演は一九七九年一〇月一六日東京文化会館にて行われた（指揮：小林研一郎、合唱指揮：田中信昭、演奏：東京都交響楽団、合唱：日本プロ合唱団連合）。

【凡例】

ノートの翻刻は次の方針に拠る。

一、本資料は横書のため、同様に横書で示した。そのため、始まりを本誌背表紙側からとした。

一、旧字体、異体字は原文通りとした。

一、仮名遣いは、原稿の通りとした。

一、誤字、脱字と思われる箇所も資料の特性上、原稿の通りとした。

一、判読できない文字は〓とした。

一、削除部分は、判読可能なものは二重取消線で、判読不能な字は■とした。

一、本資料は赤色、青色のペンによる書込が多数あるが、印刷の都合上、すべて黒とした。

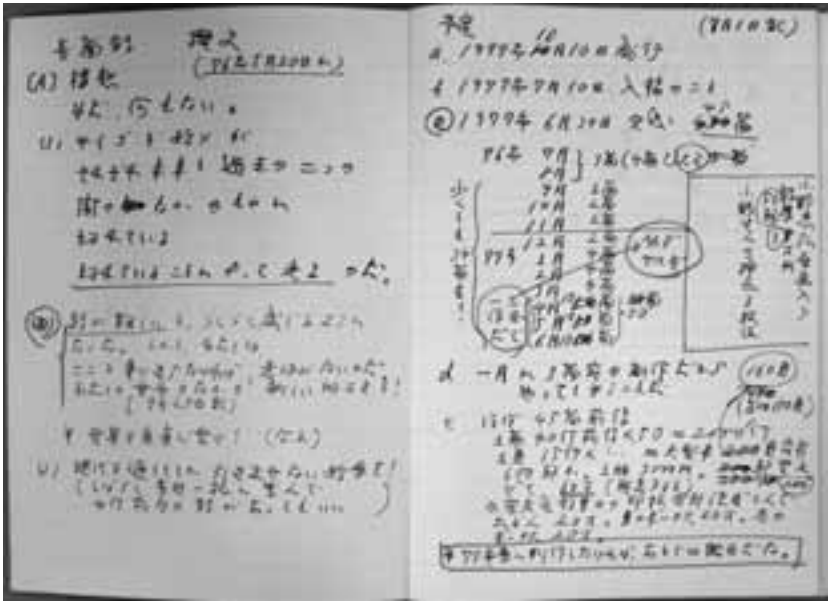
一、頁をまたぐ矢印は※を付し、接続先の頁数と番号で示した。

一、本文中に、今日の人権意識に照らして不適当な表現・語句があった場合でも、原文の芸術性・歴史性を考慮してそのままとした。

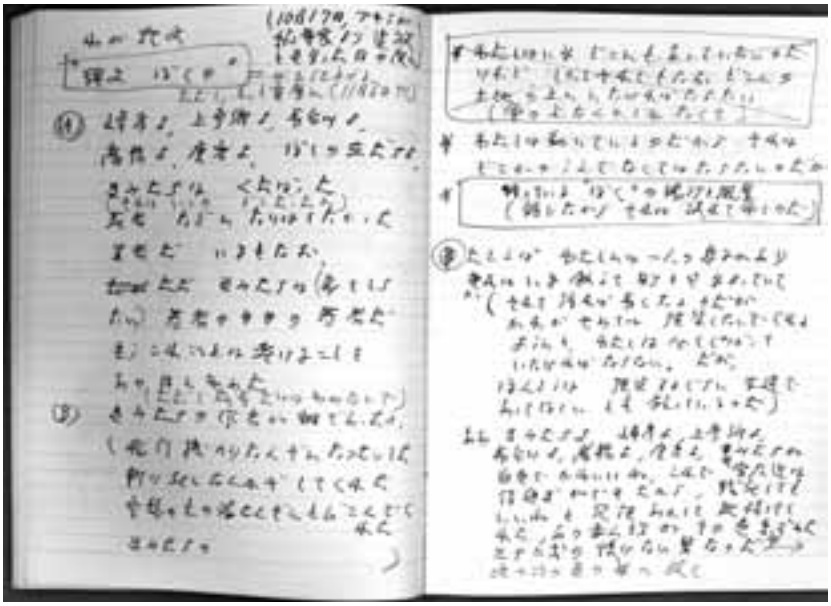
縄文　長篇詩ノート
表紙

縄文から続縄文へ
表紙

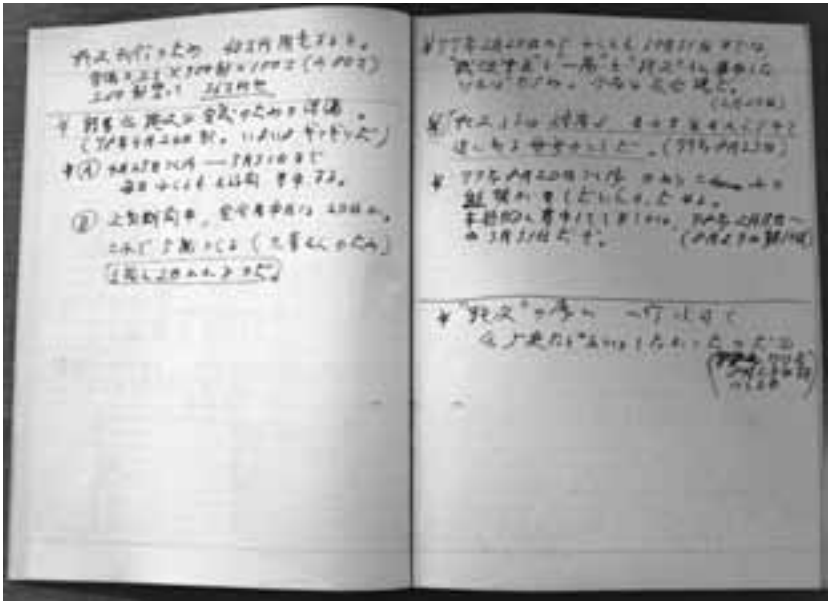
三善晃氏に捧げる縄文
表紙



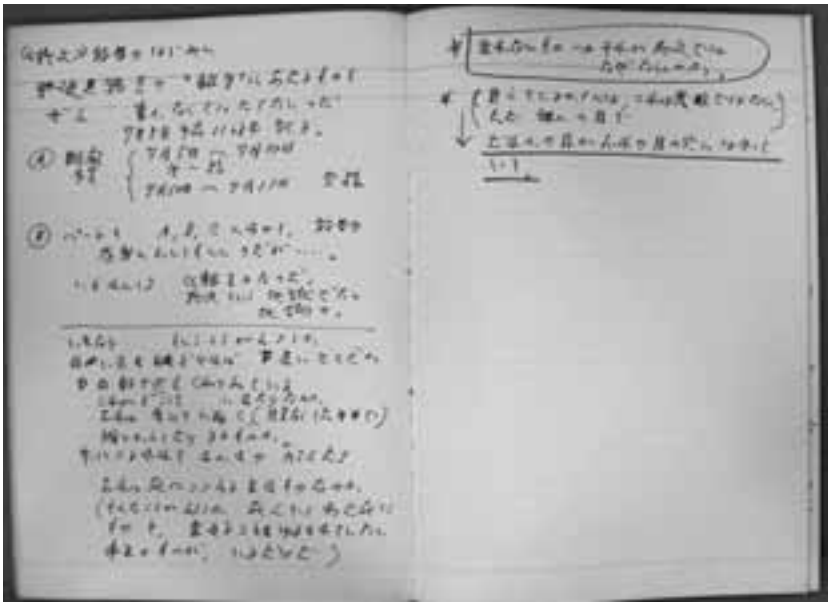
縄文　長篇詩ノート　2、3 頁



縄文　長篇詩ノート　114、115 頁



縄文から続縄文へ　2、3 頁



三善晃氏に捧げる縄文　34、35 頁

主な寄贈資料
二〇二一（令和三）年度

■川柳関係資料　一式（短冊、書籍など）

寄贈者　古谷龍太郎
受入月　二〇二一年四月

古谷龍太郎氏（一九三七～）は全日本川柳協会幹事で、川柳くろがね吟社主幹。寄贈資料は、金子哲也、深田天声ら現代川柳作家による自筆短冊、川柳に関する書籍など。

■山鹿桃郊より向野楠葉宛葉書　一点

寄贈者　向野利彦
受入月　二〇二一年五月

向野楠葉（本名・利夫　一九一一～九四）は昭和期に北九州で活動した俳人。八幡製鐵病院に勤務しながら、皆吉爽雨に師事した。軍医として応召中に初句集『柳絮』を出版。山鹿桃郊の没後、俳誌「木の実」を主宰した。寄贈資料は一九七一年の年賀状。寄贈者は向野楠葉の子息。

■森崎和江　旧蔵資料　一式（原稿、取材ノートなど）

寄贈者　松石泉
受入月　二〇二一年五月

寄贈資料は森崎和江（一九二七～二〇二二）の、原稿、取材ノート、執筆資料、書籍、雑誌など全一〇二九点。寄贈者は森崎和江の長男。

森崎和江は福岡県ゆかりの詩人・作家。日本統治下の朝鮮半島で生まれ、戦後、丸山豊主宰の「母

音」同人として詩作を行う。五八年、筑豊の炭鉱地帯に移り、谷川雁、上野英信、石牟礼道子らと「サークル村」を刊行。翌年、女性交流誌「無名通信」を創刊。詩集のほか、『まっくら』（六一年）や、『からゆきさん』（七六年）などをはじめ、評論、エッセー、小説などを多数発表した。

■麻生久 関連資料　一式（資料ファイルなど）

寄贈者　麻生壽々代
受入月　二〇二一年六月、二三年三月

詩誌「沙漠」の代表を長く務め、北九州詩壇を牽引した詩人・麻生久（一九一九～二〇一〇）の旧蔵資料。日記などの資料のほか、写真フィルム、8ミリフィルムなど。寄贈者は麻生久の長女。

■劉寒吉 旧蔵資料　一式（劉寒吉資料、火野葦平資料など）

寄贈者　濱田源一郎
受入月　二〇二一年九月

小説家・劉寒吉（本名・濱田陸一　一九〇六～八六）は、郷土にまつわる歴史小説を執筆したほか、森鷗外旧居の保存や、火野葦平らの文学碑の建立など、地域の文化活動全般に貢献した。

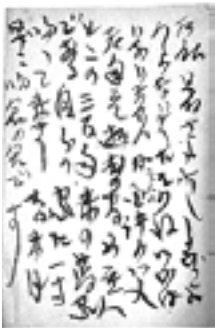
寄贈者は劉寒吉の長男。寄贈資料は、劉旧蔵の手帳や書簡、火野葦平直筆資料「木綿襍志」など。

■杉田久女 関連資料　七点

寄贈者　妹尾俊男
受入月　二〇二一年一二月

寄贈資料は、安松京三宛の杉田久女書簡（三点（うち一点は葉書））、石昌子（杉田久女長女）書簡（三点（うち一点は葉書））、安松の著書『山西学術探検記』（一九四三・四）。寄贈者は安松の縁戚。

安松京三（一九〇八～八三）は元九大農学部教授で、三六年より九大附属彦山生物学研究所に赴任していた。このころ英彦山を訪ねた杉田久女と知り合ったものと思われる。久女書簡は三点とも消印などから一九四二年（昭和一七年）八月から九月に出されたものと推察される。



場合によっては30篇にする。
あまり多くても仕方がないな。
☆歩きながらでも書かなくては。
1篇が24行〜26行ぐらいのものが
過半数ということにする。
120頁前後にする。~~10月1日~~ 9月15日 発刊だ

600部刊。250部買いとり。

1800円×200=~~45万~~

250　35万 → 30万

90000

36

45万

【153-156 頁】
空白

【裏表紙裏】
空白

【裏表紙】
空白

【151 頁】
空白

【152 頁】
☆詩集“縄文”　“続縄文”を2年後に出すことにしたから

25篇くらい=6月末に版元にとどける

構成　120頁くらいか

Ⅰ　峰岸たちに　■ (a)
葬式へゆく　(b)
タクシー待場　(c)

Ⅱ　縄文を直接に語ったもの
15篇−20篇

Ⅲ　ラスト
ⓒ地震 (現在だ、爆発しない現在だ)
(配電しおわってから静かにボタンを押すのだ)
ⓐ雪
ⓑ氷■結

【139 頁】
空白

【140 頁】
☆“乗る”　　21行ぐらいのもの。
↓“相馬”に。12月1日〜31日までで。
∞.刺突文。
☆つきさす。ただし向うまではだめ。
☆~~雲~~■　瞳から消えようとしない白い雲は
あれは刺突文の光端だ
~~こちら~~からみた
裏
☆（土器はこわれ■■■るよ、こころなんぞよりさきに。でもこころでさえ、こわれたものより、いっそないほうがいいといえるか。）
☆こころなんぞ土器よりさきに
こわれているよ　突きさされるのがこわいため。

【141 頁】
空白

【142 頁】
☆屈葬とサクラの花の盃と
1月24日〜30日　この5日間で20行書き
藤宮さんへ送る事

【143 頁】
空白

【144 頁】
“遺書”というタイトルで。［“遮光器土偶”
人］
☆たった一人の母に申し訳ないことを
して生きているようで
わたしは~~母~~全世界に顔むけ出きない。
☆瞼を大きく見開いてそして瞳を　■
そのままきつくむすんで　横書一文字に
わたしは土の人形と
なっていなければならない
◯　■■涜罪にしか詩のイミはない
だけ
☆罪の目を大きくむいて
むいた目のなかでこころの瞳を閉じて
わたしはまぶしい光に堪えていなけ
ればならない

【145-149 頁】
空白

【150 頁】
☆詩集《縄文》どうしても7月5日までに
仕上げる。（2月19日改めて
銘記）
1e　1月末　1篇 (“火”に)
2e　2月10日シメ切　“相馬”に
3e　3月20日シメ切　かなり長いものを
（昨年からの続きを）
6
4e　4月1日以後　■日に 1 作。
1月に~~10~~篇。3月で~~30~~篇だ
5　5　15
5e　7月1日〜7月~~20~~日　これが完成の
作業の時間（1日1篇だ）
総計40篇ぐらいだ

【131 頁】

きみという死者の

の糸が 胸をまわって

☆おれの夢~~のなかに~~ 縄文~~は~~を~~組み~~あげられ

■~~くいから~~ ていか を ないだろうか。

◎おれ自体が縄文人の夢の登場人物だと思うことにしたい

【132 頁】

《雲の夢》 ザックバラン調で。1月2日より31日までで

になる

☆おれは雲~~の~~夢ばかり見ている

~~もり~~あがり　ひ■ろがり　ふいにさり

ふくれ　しかしおれは決して落ちることがない

☆死んだ友人のうち　もとわたしの傷つけた人間のことだけ思い出していた　いま傷つけなかった人間のほうがよみがえってくるのはなぜなのか　(1月24日)

☆貝塚とあわしてやる。

貝塚の断面口と。

☆間違えてくれるな、おれはすてられた貝殻じやあない。すすりこまれた貝の肉だ。

【133-135 頁】

空白

【136 頁】

30行ほどになるね。

~~23~~行のを一つ。

Ⅱの手法で、年内に

(12月1日～31日の予定で)

☆テーマ

~~土面~~　屈葬　　石をだかされて

その土面をとりさって　オセンベみたいに食べてやる

☆前方からやってくる~~の~~■車をまって

タクシー待場で並んでいるのなら

どうしてうしろをふりむいたりするのだろう

☆横顔につられてまた横顔が~~並ぶ~~

ならぶじゃ

ないか

☆タクシー待ち場で並んだまま化石となった　5000年後■の連中が

おれたちを 眺めていやがる

【137 頁】

空白

【138 頁】

12月2日より書く。

☆“縄文”への旅。(そうとはいわずにさ)

‖ 40行ぐらいになりそうだな。

☆旅ともいえない　ついそこまで

シャベルをもって　出かけるだけなのだから

☆知らなかった　雪がふっている

それでも　バスはのせてくれないなら

☆お天気がかくせないもの■　~~どうして~~

わたしが掘り出せるというのだろうか

☆この石はいくつ集っても
　塔となる見こみはなかった
　泉のなかから　湧き出るみたい
　だったのだが

入り日
矢を■放った　ただし　西日にむかって
（→一行の何かの描写が必要だ）
　　くるくるまって
すると　魚がひるかえって　消えていた

【128 頁】

☆陽があがると　■■
　むしられた花びらみたいに■ならんだ
　落ちている石の花びら大きな花弁たち

㊆中央の石柱から光が垂直に
　吸いあげられてしまうと
　列んでいた石列柱たちは
　いっせいにむしか■■■られた
　石の花びらとなって　倒れた
　（11月21日、これだけか！）

㊆倒れた石が　それ以上落ち込まないために
　　水平におのれをたもつ
　ために　その下に
　大地はひたすらそこにあった
　そして
　ないなきがらが水平におのれを
　たもっていた

【129 頁】

それが沈下してゆかないために
消えた大地と闇の下に
きみたちと並んだわたしのむくろが
あるのだろうか

貝のむくろが
きみたちが　きみたちのすすった貝がら
すすられて棄てられた貝のむく■ろが
いっせいに潰れて並んでいる

☆弓をひきしぼったまま　男たちは
　あおむけに倒れた　　生カス

【130 頁】

Ⅱ☆夢の雲と雲の夢と。　12月31日に
　　（12月1日記）　完成したい
　a.長い話（歩きながら、乗りながら、
　　酔いながら、車を夜中に
　　とばしながらの…）
　20行×10枚＝200行くらいはもたせる
　b.現代（現在と過去を語ることによって）を
　　書く。
　（オレの九州わたしのTokio、…ああ、
　わたしは人称さえも不安定で
　いっそ　第一人称は消そうと思ってる）
　c.三つの声にする。
　　A　縄文
　　B　カッコつけて「私」の独白
　　C　四字さげて　10字以内の
　　2行宛

①→⊙わたしをひびいらせることによって~~しか~~
のみ
辛うじて光となりうるものよ
(11月17日記)

影のおののきが、どうして未来でありえよう。

☆35年もたっ■てさ、どうしてきみたちをここに呼び出すのか。
わたしの死がわたしのなかで熟さないままにくされてゆこうとして　放つ　叫び声なのか
(1月24日)

【124 頁】

もっと具体を！はるかに物そのものを！

☆

【125 頁】

空白

【126 頁】

石井→これを11月20日までにしてとげて　2行
「相馬」へ。　19行くらい　7連
11月30日
26行スミ
12行→14行　ぐらいの簡潔で
奇妙な詩にしたい (11月18日)
か

☆秋田県大湯の列柱 (太陽をかたどったもの)
を考えたらいい。　15.6

合図の枝が鳴って

☆ミンナが集ってきた　~~拍子木が~~
(トリもイヌもシカも雲も枯れ葉も)
(魚~~と貝だけは~~だけは■に止められた)
祈りが湧き出たて貝 (かい)　踊りはじめた

☆ミンナは身をふるわせ~~た~~　~~踊った~~　~~叫んだ~~
(音楽がとどろいていた　しかし
誰にもそれは聞えなかった　)
(魚はゆきつ戻りつした)
泥の　たっ

手に
弓をもって

☆渦がわき~~おこっ~~ていた
(砂ぼこりなど舞わなかった)
砂金みたいにまじっていた太陽の光が
ふきこぼれはしなかった

☆突ったっている石のなかに
魚が一匹さか立ちしていた
☆雨がかかると石のなかから
電みたいに~~鰯の~~ウロコが光った

【127 頁】

断絶語法でやること

☆人のイノチとなるかもしれないものが
まどろんでいた　倒れ
ただその影はもう野末に~~ふせ~~たまま
土にしみいろうとしていた。
~~☆わななきが立てたまっすぐな石~~
(ただしかげろうはゆれやまない)

☆
~~誰~~みんながうしろをむく
列柱のなかの一本だけが
~~高~~　身のたけを長くする
(まだ悲しみはかたまらない
恥しさにくるみとられても)
ただ影だけは一向に長くならない

【118 頁】

☆きみたちという縄文のあとに
いったい何が■続くというのか
弥生ではない　須恵ではない
土師では
平安でも　桃山でも　江戸でもない
それ自体存在することだけが唯一の
価値だった前衛よ
（しかし■っていた本~~隊は~~陣は
衛
いったいどういうものだったのか）
☆きみたちという縄文のなかから
逃れて（はずれて、はねのけられて、
さ）
遠いところにわたしは浮んでいる
そのわたしはいったい何なのか
☆背中からはいってゆく■ところ■
いったい　どんな未来といえるのか
それが
※119頁①へ

【119 頁】

①
☆きみたちは光なのか（苦い）それならばきみたちの光があたって透きとおらない　ぼくの縞の波　波の縞が$\boxed{\text{ぼくの罪}}$というものなのか（11月6日記）

【120 頁】

☆きみたちに　不思議なことに過去は
ない
（老いる人のみ　老いない前の過去とつながる）
わたしに　当然ながら　未来はない
そのきみたちとわたしがともに
生きる現在、それが縄文という
作品でしかないのだろうか

【121 頁】

空白

【122 頁】

◎ 未来 $\boxed{\text{かわりに空があるだけだ}}$
☆未来なんぞありはしない　きみたちという土偶を（縄文のさ）
つきぬけて　とめどなく時間を
始原までさかのぼってゆくほかに
わたしの未来なんぞありはしない
（10月19日記）
☆わたしのうしろにある縄文の焼きもの
それの投げる影の矢が ~~あびせられる~~
ゆく。
※123頁①へ
わたしを貫いて ~~わたしの前■で~~
~~またたいている　それが~~
~~わたしの未来だ　（11月6日記）~~
☆ 縄文　ヒト
縄文■の土器のうえに空があった
掘り出されて■土器が崩れるとき
それの支えていた空が破片となって
わたしのなかにはいった
（11月13日記）

【123 頁】

☆女が■壺を焼き終ったとき
そこは~~火山~~噴火口だった
女は宙にはじけとんだ　と思った
そしてそのまま　女は宙~~から~~に
浮んだままでいる
だから壺はまだ　噴火口なのだ
（11月13日記）

(B)きみたちの作者が誰であったか
（飛行機のりなんぞになったりした
斬り死になんかぞしてくれた
空襲の火の海なんぞに飛びこんでくれた
きみたちの　　）

【115 頁】

~~☆わたしはいまどこにも立っていないのだけれど、しかしそれでもなおどこかの土地の上にいなければならない（雲の上なんかじゃなくて）~~

☆わたしは動いているのだから　それはどこかのうえでなくてはならないのだが

☆ 語っている“ぼく”の場所と風景
（語りながらそれは流れてゆくのだ）

☆たとえばわたしには一人の息子があり
~~そ~~れはいま飢えて町をさまよっていてか（それを語れば長くなるのだが
かれがせめては強盗しないでくれるようにと、わたしは心をくばっていなければならない。だが、
ほんとうは　強盗するぐらい不逞であってほしいとも願っているのだ）
ああ　きみたちよ　峰岸よ　上参郷よ、長谷川よ、高橋よ、虎光よ、きみたちが白色でかわいいね、これで宗左近は後継ぎができたのだから、戦死してもいいねと冗談めかして祝福してくれた、あの赤ん坊がその色青ざめた三十二才の情けない男なのだ☆→次の次の頁の☆へ続く

【116 頁】

作者が誰であったかもう判らない
だが、こわれてしまうことによって
きみたちは作品■■■となった
そしていまきみたちから決定的に
時間の透明な壁でへだてられて
改めて■■ふりかえるぼくの前で
（ぼくのうしろにいったい何がある）
という名の作品
その破片は~~きみの~~身をおこし
つながりあわさって　新しく~~作品と~~
動き出そう　　のか
~~なろう~~としている　ああ　ぼくの縄文
☆ぼくをつきぬけるために　しばらく
ぼくのなかで動いている
ぼくの縄文（11月6日記）

【117 頁】

☆だが、それにしてもなぜこうなったのか
わたしに祈りの強さが、息子よ、わたしよ、
~~こう~~なってほしい、こういう世のなかを作って
ああ
ほしいという祈りの激しさと鋭さが、
なかったせいなのではなかろうか。

若者に

③→少女は逃げていた恋されて

少女は追っていた　恋して

~~もう一人~~の若者に
別

【112 頁】

（黒い影はいつも
さきまわりして
いる）

㊆少女は追われて河原にきた

鳥が水の面に浮んでいた→※113頁②へ

鳥はむこうの山を見あげていた ※113頁①へ

少女は鳥を見やっていた

なかった

眞晝だった　河■原にどんな影も落ち
ふいに少女は目かくしされた
鳥がこちら眩暈にをむいた
少女の視線が切れあがった

空から矢が落ちてきた二本七本十五本
それらはキラメキの矢じりを光からせて
つきささってきた

何を語ろうとするのか。

惨劇とそれを誰もが見~~ぬ~~ていなかった
ために→発掘されたとき、しかし
何がそこから光となってとび出して
くるというのか。

これを
追及する事

（11月9日記）

倫理と美の接合点（であるとともに分裂点）
そこにひたと目を据えて離さぬのが、
おれの詩だ。

【113 頁】

①→ここから考える事。

②→（~~弾丸に~~矢が抜かれない~~うち~~間~~に~~
瞳に突きささっている雲）

◎~~砂~~

小石たちは割られる前の貝みたいに
口を閉じていた

☆喘ぎはいつまでも白いもや ~~や~~となって、
~~風に~~　　の風となって

男の髪の毛をそよがせていた（まずい）

㊆カッコを多用する（泣くことは許さぬ）

（薪とならねばならぬ）

【114 頁】

10月17日、アキラが
稲葉家より追放
ときまった日の夜に

わが縄文

“縄文　ぼくの”＝ぜひ仕上げる

ただし、もっと重厚に（11月6日記）

Ⓐ峰岸よ、上参郷よ、長谷川よ、
高橋よ、虎光よ、ぼくの友だちよ
きみたちは　くたばった
（それは　いつの　どこだったか）
死者　などに　なりはしなかった
生者だ　いまもなお、
~~だが~~ただ　きみたちは（年をとら
ない）若者のままの若者だ
もうこれ以上は老けることを
あの日にやめた
（ただし成長だけはやめないで）

☆上にもぐることによって、
流れるこの時間は　■渦巻きとなり
渦巻きとなったまま　完結するので
しょうか。
（以上9月28日記）

㊆会話体でやる事　いっぽうにカッコを
つける。　21行くらい
‖
蛇や貝や船など、生活器具だけを
使って（空や水や光などの語句を
出さずに）それだけで、相聞書か
なくてはならない。

【105 頁】

すてられて
（流れのなかに腰紐が~~沈んで~~いる）
（いいえあれは蛇なんです）
（伸びっきりになっている　ひでり
の日なたのツル草のように
（鳴り出したくって身をくねらせて
いる笛）
（鳥が~~おち~~てきたわ　翼をたたんだまま）
落ち　■に青さを
女が男をユーワクしてゆく歌を。
序々に　テレンテクダを
見~~せ~~えかくれさ
せながら。

【106 頁】
☆“はじめてのもの”　連作を書く。
あるとき、闇の光端で突然の変化が
起る、とはどういうことなのだろうか。

☆殺さねばならぬいわれはいつも
いくつもあった。だが殺したあと、
理由は幾つも見つかったのだ、
自分は正しくなければならない　と
思わせるものこそ殺人だったのだ
から、（11月9日）

【107-109 頁】
空白

【110 頁】
☆視線　“相馬〟へ
~~少女は~~　浮んで　※111頁①へ
水のおもてに鳥がいた
少女は~~鳥を~~目をあげて　鳥を見た
↓鳥は~~少女~~雪~~を見~~のほうをむいていた
少女は視線を鳥に■射こんでいた。
（少年がいきなり少女の目かくしした。）
※111頁②へ
すると視線は鳥のむこうにつきぬけ
た。
~~胸~~乳房は爐のように熱かった
こめかみは赤ん坊のように
脈うった
※111頁③へ

【111 頁】
①→（よくある風景である）
夢のなかではなかった。

②→少女はいきなり目かくしされた
（闇の背後にいるのは恋人だろうか）
乳房が冷え　そして燃えはじめた
視線はそのさきだけを鳥の
羽根のなかに置きざりにした

【96 頁】

☆耳をすませばほのかに海鳴りに似た
　唸りがきこえる。
　ただし、耳はただよってい■て、
　一か所にと■どまることができない。
☆いまもなお、流れ去っている液汁。
☆切断されれば断層の~~波うたない~~
　~~波うち~~おのれを支えあって波うち
　うつろ　呻きの地平の　いる白い
☆泳ぎいって凍っている視線の
　電光、融けつつある塔よ。
☆（潜ることしかしない）船の~~竜骨よ~~
　■　　溺れやんだ　　吃音。
　もぎり落された竜骨の吃音の等高線
　　溺れてゆく　　波紋の
☆
　（わたしはその■遠くの一筋にひっか
　かってゆれている　　）
こんなイメージは、もうダメだ。

【97 頁】

☆その等高線を裁ち落して、
　数多くの石碳とすることはできないか。
☆遠い日の悶えは、離れて見~~ること~~
　てはならない。そうすれば必ず罰が突き
　ささる（悶えが必ずしも、その罰では
　ない　おかしい　いらだち）
？　これを1日で散文詩にして書きあげる事
　9月21日から22日で仕上げること
☆

【98-99 頁】

空白

【100 頁】

☆縄文の土器をつくる女の歌
　縄文語によるもと歌
　それを三様ぐらいに現代語にすること
[A]

☆焼かれるのは男だ　だからこの
　粘土を　焼くのもまた男の役目だ

【101 頁】

☆脚頭韻をふむこと
　　（インデアンの
　　祈りよりもっと激しい）
　ヅワーラ、ラリンロ、リンロリ■リ、
　エバータ、クネート、ワンロワロ
　　サーシャ　チリール
　　ダロダロ　~~パー■ニヤ~~
　　パニーヤ

【102-103 頁】

空白

【104 頁】

☆相聞　（1篇5行×20字以内
　　これを10篇
　　「相馬」へ。シメ切11月20日
　男女（どちらが男とも女ともつかぬ■ヒト）
　↓
　の二人の呼びかけを通して、
　より巨きなもの
　より背後にあるものを、訴えかけ
　によって喚び出す~~こと。~~試み

炎であるために　　→これを書く。
墳墓~~をもた~~ないものと
おのれが墳墓であるために
炎をもてないものと

となりえ　り続ける

【92 頁】

よび
☆魂を~~とり~~戻すことが、(肉体のなかに)
鎮魂なんだな、昔は。

【93 頁】

空白

【94 頁】

㊆貝塚＝　散文詩にする　→2月13日了　17行
(9月16日記)「相馬」へ
9月18日1日で書き上げる事
㊆なきがらはなぜ棄てられなければ
ならないのか。
☆一つ一つの貝のなかを　ぬめぬめと
光らせていたものの舌
㊆ヒトの舌にからめとられていって
しまったものの舌　から
☆目をもたぬもの、目■みられないもの、
●未来へ歩むことが決してないもの、
光のさしこまないものの光の
かわりとなって　引きずっていった
■　もの、
それらの舌
㊆貝のむれは、殺された順序で
ならんではいない。そのじぐざぐの、
■むさぼる行為と棄てる動作の
そのきまま~~を~~のつくる縞模様が
それがなきがらとなるものの
恩恵だ　　(9月16日)

【95 頁】

☆詩に恩恵などない。言葉に~~恩恵が~~
実みがあればいい。~~方向~~　重みの
方向、それが恩恵だ。
☆なきがらから抜け落ちていったものが
闇となりはしない。それは古い水となる。
せめて、■空に浮んで雲となってはくれ
ないのか。　　(9月18日記)
☆なきがらはなぜ堆みあげられなければ
ならないのか。
なきがらから去っていった
☆ものの空虚の~~重みの~~ためにおしひし
がれて　堆みかさなった、その
■堅い重さよ
☆ある日一枚の唇がそこから垂れさがって
いる　赤らんで
濡れて
☆思想~~は~~何を動かす■ものか。
が　おのれ自身を動かして~~ゆく~~
◎~~思想こそ~~しかもすこしも移ってゆかない■
思想、花。

☆~~剣はいつも光という血■で~~
~~濡れていなければならないから~~
☆壺はいつも灯りの目を
さけていた

【83-85 頁】
空白

【86 頁】
☆海士(あま)─軽快でドラマティックな
↓　　短篇にする事
モリ■とヤスで魚をとった。
ヒルコ←ヒコ
ヒルメ←ヒメ
おれの
☆愛の行動の始源
☆モリで女を突いた
さんざ突かしておいてから
女は海にもぐった

☆おれがおれから離れたあとも
おれのもりはまだ突っ立っている

【87-89 頁】
空白

【90 頁】
☆墳をもてないものよ。
歴程へ。
9月19日厳守
(9月10日記)
33行くらい
無限ポエトリーに
☆縄文の土偶よ、
☆墳をもてないものの■■■かわりに
きみたちは立■ち続けて■きた
のではない、
☆きみたち自体が墳~~ぇ~~なのだ
☆しかし、墳をもたず、また土偶とも
なりえなかった、わたしの死んだ仲間
たちよ、
☆あがってこない潜水艦のなかで
立ち続けている　わたしの友よ
☆突きこんだ海のなかで爆撃機の
操縦桿■■■■■■■いるわたしの友よ
~~ぎり~~　をにぎりしめて
☆~~そして~~　片手に飛び散った■~~空の~~青空の
破片■■つかんで~~あの岩のかげで~~
草の下で
白目 を
むき続~~けている~~わたしの友よ
出してつぶらないでいる

【91頁】
☆そしてまだ明けない夜の闇のなかで
~~死体~~よりも明るく眠り続けている
電燈　　わたしのわたしよ
☆土偶よ、明るみの暗さよ。
こちらに
☆縄文よ、歴史の■■突き出た、
~~歴史の~~少しもはじまらない
はじけない（?）　歴史■の向うよ
(9月12日記)

【72頁】
☆はらみ女　　詩一篇
☆はらまれた胎児は
　3000年後のわたし~~は~~の視線の
　石礫をうちこまれるために
　胎児として成長する
☆祖霊など、ありはせぬ。

【73頁】
空白

【74頁】
☆言葉以前の記号のドラマだ
　　（1篇）
☆ある■とき　一晩で
　川が流れを変えた
☆少年の家の前には白い
　河原しか残らなかった
☆魚はどこへ泳いでいったか
　~~川の~~河原のむこうには森しかなかった
☆

【75-77 頁】
空白

【78 頁】
☆■■壺　（相馬）~~10月10日~~
　　9月30日シメ切
~~まだない~~　使われなかった
☆ロクロの~~かわりに~~回転を逆に辿って
わたしの
　眩暈が ~~まわっていた~~ ほどけてゆく

☆呻きは粘土のなかから
　洩れでてこなかったか
☆神の与えた
　眩暈がまわっていた
　まだしらないロクロのかわりに
☆血は粘土にぬりこめるほか
　なかったか
☆まだ生れないロクロのかわりに土に
　眩暈を與えて廻しているもの
　それはヒトビトは巨きな母と呼んだ
　母の血は

【79 頁】
☆いまわたしは近か近かと向いあって
　土のなかの眩暈■が炎となるところ

【80-81 頁】
空白

【82 頁】
☆盃一篇　（9月7日記）
☆こころはみたされなければならない
　そのためには
　酒をいれたまま盃はこわされなけ
　　ればならない
☆逆だろうか
　こころはこわされなければならない。
　盃はそのために　みたされなければ
　ならない。
　もう一つ、第三の要素が必要だ。
☆挽歌のなきがらを~~集めて~~叩き割って
　祝典の薪としなければならない
☆この空間を新しい光で
　ひびいらせ■なければならないから

【64頁】

☆闇　←　くぎられた闇
　　何が区切るのか

○少女の肉を青年の胸が区切る
　ように

○叫びが紅い石礫となって
　紅い石礫が細い叫びとなって
　~~とどいて~~
　突きささるのだろうか (9月3日)

☆もっと現代人の心理を　→一方で。

☆もはや　焼きしめられたものとして
　器の土のなかにしか　光りはない。

どんな光りだ！？

これを追いつめる事。

【65頁】

そしていま、
　おのれの肉のなかにも　もはや
　闇はないのではなかろうか

ああ、青い影~~だけが~~　のゆらめき
　　ばかり

☆森は焼かれるため■だけに生い茂って
　いただろうか
　　(月は湖のなかにかくれていた)

☆　濃密な闇よ、

【66-67 頁】

空白

【68頁】

☆詩一篇　23行ぐらい
　　8月31日〜9月12日までに。

☆石

☆礫のドラマ。→これだけに絞る事

☆石■斧

☆礫は光という苔にまみれていた。

☆礫の突きささったところに
　血のかわりに　光の緑青がふきで
　てきた。

☆深みに沈んでいる結晶は、
　たち割らなければならない。

☆はじめに割れるもの、それは
　深みの底で
　~~目を~~見はっている
　■の結晶だ。

花

~~光の~~
闇から
にじみ出た
光の

【69頁】

☆礫は決して粉々になることがない
　地球がほろんだあと~~に~~の青空■

に浮んで

空の青さの微塵となって　澄み
かえるまで

☆小さな雲の破片となるときまで。

☆ほっかりあいた空虚に小さな光の
　滴りをかげらすときまで

☆始原があるからこそ未来がある
それなら
未来がないとき　始原もないのか

【70-71 頁】

空白

【59頁】

~~斜~~

☆遮光器土偶　→　これを書く。

愛~~の■なぜ~~という　~~ふやけた~~粘っこい

ものなど　~~わたしの女性は~~

~~おれは~~ ↑受けつけはしない

わたしは

《女性》だ。

☆おのれを閉じることによって

（の瞼）

おのれのすべてを大きな目（闇の）

とするのだ。

（青い）

①→(ゆれている海~~ま)~~の底の泡だちよ)

【60頁】

☆詩とは、(ことにこの縄文においては)

やはり　神を求める作業だ。

遮光器土偶

☆~~傷ついた魚が沈~~~~む~~とき海の底の

泥は瞼を開けないでいることが

~~できようか~~　（スミ）

針をのんで

☆

【61頁】

空白

【62頁】

☆詩一篇　20行前後

8月31日―9月6日までに

完了の事

◎けだものの闇

闇のなかには　けだものしかいない

闇は　　けだものでできている

※63頁①へ

けだものの赤い曙がいるのだ

◎必ず大きな欠落があるに違い

なかった、世界には。

そこからあがってくるからこそ

月はあんなに青ざめているに

きまっていた。

◎少女は■むこうばかりをむいていた

少年がかけまわってつくる輪の

なかで。

夜中の夢の　なかで→少年は輪のそと※63頁②へ

そとで→沼は一晩で　※63頁③へ

【63頁】

おいしい味のする詩を！

①→かもしれないのだが

☆闇の対極は何なのだ？

眞晝なんかではない。月か。血か。

乳房か。ガラスか。星か。―

それとも、“愛”か。まだ、人間のほう

に向いていない“愛”か。

②を　しだいに遠くまわりはじめていた

③二倍の深さになった

【56頁】

《相馬》のための2行×7連

17行スミ(20行くらいがいい)

シメ切 8月11日 (ほんとは4日なのだ)

8月26日了

☆8月9日より、とりかかる。

☆闇のなかの目　がひらく

　目のなかの闇　があふれる

☆もう一つの闇　泥の闇

☆その~~奥~~に過去をもたぬ過去

背後

　泥の底の闇の奥の泥

☆海はもう波うちよせてきていたが

　その波の帰ってゆくきはみ■の

　ひたすらな青さのなかに

　吸いこまれていったものはついに

　帰ってくることがなかった

☆海のひびきを壺にぬりこめていた

【57頁】

《おれはきみたちのほうに

の目

　むいているのだが

　見ているのは　しかし

　おれではないのだ》

☆矢の突き刺さったとき

　雲の破片は鳥となって飛んだの

　だろうか

☆~~抱きしめれば息づきはげしい鳥の~~

　~~剥製~~　スミ

　~~壺のなかに心蔵はない~~

☆肉のように厚い時間のなかを

　刺しつらぬいて　~~光が走らなかったか~~

けだものの

　走る戦慄はついに光となる

　ことはなかったのだろうか

　その光端でだけ光を血のように

　噴き出していた

【58頁】

☆おれの縄文の思想とは、いったい何

　なのだろうか　を黒ずませる

☆誕生したばかりの生の熱さ　のなかに

ある罪

☆闇の肉の熱さ＝原初を描くのだ

☆舟が海の底に沈~~もまえに~~

傷いた魚が　むとき

叫ぶアブクだけが~~あわだち~~登るように

闇のなかからあわだってくるものがある

剥し

☆落~~ち~~てゆくものの~~空虚~~つくる空虚を

　そめるためにこそ暁は赤いのだ

☆陸を背中にして曙に向かいあうように

→※59頁①へ

　わたしは何に立ちあっているというのか

(ありえない海のかわりに

　そこに~~壷~~焼かれた壺があるの

　だろうか。　どんな

砕けようとして

北海道小樽市の八百屋の次男長谷川章二、
　き■みは大学の哲学の
　　北京で切り死にした
同じく　の石炭商の長男上参郷匡、
とんで 東京都本所菊川町の医者の次男
　　高橋哲男
また東京都　　の四男
　　虎光法和

【42頁】
☆はじめになくてはならぬのは挽歌
　　だ→※43頁①へ
☆おれたちはおれたちを挽く

☆おれたちはおれたちの外部であって
　　おれたちの内部だ
　　（きみたちの光
　　きみたちの闇）
　　［みんなの~~炎~~ほむら
　　みんなのししむら］
☆星雲のなかから　おれたちはきた
　星雲をつきぬけて　おれたちは
　おれたちをつきぬけて　ゆかねば
　　ならぬ

【43頁】
①→現代語にして古典語たる
韻律と言葉を発見しなければならぬ。
そしてゆたかなポリフォニックを。

☆きみら、親のつけた名前しかもた
　なかった、
　きみら、~~き~~おのれの名前の以前に
　帰ろうとするもの、そして、
　きみらが決してはいってこない時間の
　透明なシキリのこちらで
　きみらを見つめながら　名前を失って
　ゆこうとする　わたし
　わたし~~き~~はきみらの透明な闇にかえっ
　てゆくために、
　わたしはその闇を不透明で
　濃密なものの渦巻きにかえし
　その渦巻きにのみこまれて
　わたしはきみらの名前のそのうしろ
　に還ってゆく
　おお、縄文、
　きみらのうまなかった子供たちの
　はるかな原始。

【44-47 頁】
空白

【48頁】
☆雷雲、豪雨、稲妻、洪水、暴風雨、
　火山、→巨いなるもの、それは
　あまりにも感じられるものであり
　すぎるから
　かえって　見えはしないのだ。
㊆知らなければならぬもの、
　そんなものは　無かった。
　殺さなければ殺される、
　ということ以外は。

【49-55 頁】
空白

☆晴れた空のなかに小鳥~~たち~~は
まるで魚のようにゆっくり泳いでいた
それが　少年の~~裸の~~肩の裸の筋肉
にすりよるとき　少女はそこと
自分の胸とが　青い光でつながり
あうのを感じた

【38頁】
《闇のなかの目》
☆焦げる　窯　目のなかの瞳の火
まだできていない窯のなかで
薪だけが　闇の目をいぶして
いる
☆それ以前の過去のない過去

☆目のない面（おもて）
☆目~~が~~見開らかれる面
の
☆人玉が漂って去ったあと
野末はいつも焦げている
なぜ炎えたつことができないのか
☆

【39頁】
☆閉じ込められている　~~曙~~が
夕焼け
かがやき出てくる
☆~~苦しみを~~悶えを包んでいる夕焼け
いぶる
夕焼けを閉じこめている壺

わたしの■なくしたライターが
自然に発火している　の蓋
開いて

☆ 遠すぎる鎮魂よ
~~近すぎる~~
まだ来ない
挽歌よ

【40頁】
☆縄文のおさけび　→　第Ⅰ部
（のような、韻律ゆたかな）
現代《長歌》を三篇
(A) 出陣
(B) 挽歌
(C) 祝~~の~~典歌
合唱曲（三部からなる）
はじめから、そのつもりで
作曲を予定して、書く

☆これをぜひ書く。これが戦争に
死ねなかった、老いない若者の、
後世に残す　歌だ。　ああ、
若いままで歌っている　かつての友、
峰岸よ、長谷川よ、上参郷よ、
高橋よ、虎岩よ、きみらの歌だ、
合唱せよ、そういえるきみらの歌は
なく、ないかわりにまた　ぼくの
追悼歌もなく、未来への歌も…
第二の序にする

【41頁】
1976年~~記す~~　7月17日記。　77年5月1日までに三篇、ぜひ仕上げること。器物その他に縄文のものを幾つか使用すること。
貝塚、大湯列柱、その他を。
山と野と森と川と、そして空気を
~~是~~
栃木県足利市の機屋の三男 峰岸啓三
~~北海道~~　きみは大学の地球物理から
フランス文学に転じて（いやいやながらに）フイリッピンの原野で

【34頁】

《無限ポエトリー》のための14行

2行×5連　　45行　　7月6日頃

「縄文相聞」　　になる

☆■舟

☆(いま　星は大地の底から

掘り出すよりほかに見つからない)

一行にする事

☆(いま―もう星は大地の底から

見つかっても―瞬間に石となるほか

なかった)

いっせいに

☆心のそとで　鳴いていたセミが一匹

いま　壺のなかで　鳴いている

とぎれとぎれに　火のセミが。

☆ひからびた舟　　したたりおちる

~~水~~　血さえなかったから　砂の上で

舟はしきりに　風の■なかに

のりいろうとしては　ひびわれていた

【35頁】

☆わたしの身体が愛~~に~~の炎でとけて

流れだす　　のではない

わたしの身体がすっかり炎えてとけて

舟~~壷~~となったとき　その~~壷~~が愛

なのだ　　舟

☆舟はくりぬかれることによってしか

浮かばなかった　　壺は

~~愛は~~組みたてること~~を~~　まだ

知らなかった　　によってしか

立たなかった

なかの

☆貝の肉　　肉のなかの貝

まだ人の手の上で重みをもつこと

のなかった黄金は　ひたすら

○闇のなかで簒奪者をまっていた

ツバキをのん~~で~~だおのれを　とざし

たまま　とけて

【36頁】

《相馬》のための　23行

2行×8連（または7連）

☆~~命~~　目玉のなかで　瞳は左右に

違っていた。

(猫の瞳をあわせれば

十文字ができたであろうか)

☆鳥　がテーマだ。

☆　鳥を打っている■若者は

まだ闇のむこうから矢が

貫いておのれの死がくることを

知らないでいた

(大陸からの侵入を予想だに

しなかった)

☆矢のさきにはいつも宝石があった

目をひらかない瞳~~が~~となって

突きささるために

【37頁】

☆嵐

☆少女は　小鳥をかうことを覺え

なかったから　その目はいつまでも

涙をため■ていることを知らなかった。

☆嵐はいつも愛のなかからしか

吹きおこらなかった

【31 頁】

☆梅雨はこの地帯に訪れることをまだ知らず
しかし、いち早く■■のこころのなかを
ふりこめていた
女

☆魂はまだ大地を去ることを
知らなかった　刻まれることが
なかったから　土のなかに
その呻きが

☆いくさはいつも　山からまた
(血が流れやすいために
谷間はあった)

☆平和は必ず河原で~~散った~~乾いた
小石は洪水に運ばれる~~のを~~
~~待って　光った~~　前に砕けた

☆~~男は~~這いつくばっ~~そた~~た男たちの
なから血の噴水みたいに
女たちは立ちあがった

【32 頁】

☆涙の塚

☆むさぼられて投げすてられた貝殻のなかに
それでも~~未~~光ってまたたいていた
夜光虫よ

☆闇はまだ明けることを知らないうちに
だがすでに　おのれの■を鋭い
肉
■流れ星に　刺繍されていた

☆~~地球は~~地球という~~の~~小さな天秤は
~~あ~~すでにあったもの と まだないもの
多量の　少量の
との間で

しかし 微妙に ~~均衡をとっていた~~
左右にかしいでゆれ~~そ~~いた
始めて

☆~~涙の~~
たまった多量の涙が
もう涙の乾いてしまうだろう未来の
■いたずらな重さにたいして
つりあって均衡をたもっていた

【33 頁】

☆ヒコ (火~~兒~~子)
ヒメ (火女)
ついに記されることのなかった名前
それを　きざみこむために
こころという粘土は　うまれなかったのか

~~☆　舟が流れてゆく＝　■の舟が~~
~~(どこを?)~~

女たちは煮えた土をこねて人形を作った
涙で

女たちは死んだときタマシイとなった
男たちは死んだとき
崩れた人形よりこなごなな土とに■しかならなかった

ゆれてい

◎たまっている重い涙
~~流されないままに乾きついた~~
~~未来の~~　ひあがっている■■■涙
その間■のなぎさが現在
なのか。

◎だが~~母は~~呻き続けたていた母が
　　目を閉じたとき
　　柱の根元は炎えあがった

【27 頁】

☆娘のままで母になっていた女

☆敵の部将を抱いて　憎しみより
　大きなものを受胎した女

○噴水でくだける曙
　洪水にのまれる夕焼け

☆たとえ瞼をふくれあがらせたにしろ
　泣くことはならぬ
　幼児を胸乳から奪われた若い母よ
　その幼児の父ではない男から
　のしかかられ　裏がえしされて

☆涙はなわれた~~ままでは~~にしろ
　ひも　となって　首をしめることはない
　　たとえくれないに
そのままで

【28 頁】

☆母よ、なぜ溺れてしまったのか
　泥の光の海のなかに目を
　あけたまま　　愛の

☆自分■の外の闇を明るませる
　ために　タキギをもたなかった
　母よ

☆闇と明るみ■のまじりあう
　あたりが 肉のように 部厚かった

【29 頁】

空白

【30 頁】

《短歌》のための©　27行
　地鳴り　（海鳴りとともに）
　　と地鳴りの区別が
　　なかった。

となかい
過去［鹿に似たものの角がもえた
現在［テーマ《いくさ》と恋

☆涙の流れがなわれて
☆縄とな■ったのではなかった

男
☆~~七~~はまだ柱となることを知ら
　なかったが
　女はもう舟となってウガタレ］ていた
　　（穿）れ

☆まだヒトとならない［もの］が
　　［泥］
　まだヒトをうみたりないものが
　　夜のようにおおきくふくれあ
　　がっていた

【23 頁】

☆雪煙りは天 山 のいただきに
おのれを吹きあげたまま
まだ凍りついていた

☆しめった（濡れた）縄がよじれた
まま炎となって　はしる
乾いたこころが　網みたいに
ひびわれたまま　雪煙りとなる
☆~~涙がの~~あふれ落ちる涙をすった
■　泥がなわれて縄となることは
なかったろうか

未使用

☆まだひととならない~~もの~~影が人より大きく
ふくれあがって　　ゆれていた

②　抱きあったまま男女は
縄となって　よじれていた

【24 頁】

させ　　※ 25 頁①へ
☆女は感じる紐で組み上げられていた
~~粘土粘土の~~
☆粘土のひもを組んではまた
ほぐすのは男だった
（しなかった男の争いのかたちに）
そのためにおのれをほどくことに
なっても

☆縄文　人にはまだ朝が
なく　人そのものが朝だった
（影が　いっぱい　もやの
かわりに立ちこめていたにしろ）

☆発■掘の鍬のさきから
■■乳液をほとばしらせる
ために　女の胸乳は張っている

【25 頁】

①→☆男は感じる紐でおのれをぐるぐる巻きにしていた　（9月12日）
~~遠くのもの~~
☆女は男に近いものだけを感じさせて
~~いたが、~~　男は遠くのものばかり
いるはずだったが、
目でおっていたから、いつも火傷
しているのに気付かなかった。
（9 月 12 日）

【26 頁】

《短歌》のためのⒷ　27 行
《曙》　　3 行 ×7
紅のもや
34 行　3　7月5日朝《短歌》へ
☆雪煙りは山のいただきにおのれを
吹きさらしたまま凍りついていた
（浅間山）

使用ズミ

☆泣くことは許さぬ
消えることはならぬ
母よ　胸乳うちふるわせた母よ

☆男を抱くことによってしか　自分の
闇を明るませることができなかった
母よ　［男の~~火の~~柱しか吸いこめ
なかった母よ］
☆~~肉~~のように部厚かった闇
~~大地~~
沼　　の根本しか

【18頁】

これを76年1月末までに書く事

☆たまよび

小樽の石炭商長男

北海道出身∧上参郷匡　　は

のすれすれ

瀬戸内の海のおもて∧まで

目をみはっていた

足利氏~~出身~~機屋の三男

峰岸啓三は

長谷川章二

高橋哲男

虎光清和は

【19頁】

☆きみたちと遠くわたしは別れ、

もっと遠くへと

きみたちを埋めてきた

よみがえってきてほしくなかったのだ

☆だが　縄文のことを考えると

どうしても　きみたちが立上って

こちらへ

歩いてきて　どうにも仕方ないのだ

【20-21 頁】

空白

【22 頁】

76年6月4日校了

「闇」29行

角川《短歌》のための三篇

闇と火 → A　23行

☆むかしむかし　そのむかし

おじいさんとおばあさんがおりました

むかし

そのまた昔のも一つ昔を背中にして

土はこねられて　■焼かれていた

（涙のように）

いま

男と女のカラミあい。

☆たえず野火はむしろをいぶして

①炎えていた　　いた

（だが そのために 暁ははやく

来ただろうか

わたしはときたま青い水たまりを

さがしている　大地の底を

のぞきこむようにして

未使用

☆野の果てに立って 落ちてこない

滝にうたれている 若い女

【12 頁】

(構成) 計35篇前後（76年9月14日記）

考え直した。

[A] 序　峰岸たちに。2篇
[B] 雄叫び　5篇

[C] 母　2篇
[D] 子　2篇
[E] 父　2篇
[F] 恋　3篇
(愛)

[G] 船（いま書いている土器、土偶もの）
10篇〜12篇
[H] 神話（天地創造）
5篇
[I] 終詞　①編

【13 頁】

空白

【14 頁】

☆天地創造神話そのものを
宗左近が一篇創出しなければ
ならない

(A) 祝詞（これの古いのを
読まねばならぬ）

(B) 舞踏歌

(C) 戦争歌

(D) 山の歌（火山）

(E) 蛇の歌

(F) イケニエの歌
以上6篇

【15頁】

空白

【16頁】

☆天地創造神話
ユーカラを読むこと
陽根が噴きあげられたところに
地球がうまれた

【17頁】

☆~~滴り落　時間のそとにあふれでるもの~~
~~粘土のなかの滴をしたたら~~

☆ にじみでるもの~~は~~のすべてを
にじみださせねばならぬ
(☆)追うな　風を
風のみなもとを　焼きつくせ
花の死骸が　薪となって
~~いるあたり■■舞い■■■■■~~
狂うところ

小野忠弘原画入り
詩集3万円
50部
小野さんの挿画3枚位

d.一月に3篇宛の制作だから
　やってしまうことだ

160頁
（正味150頁）

e.ほぼ45篇前後
1篇40行前後×50＝2000行
1頁15行×…＝大型本~~200~~頁前後
600部か。1冊3000円。200部買上げて60万（用意する事）
《宗左近詩集》の印税全部注ぎこんでたぶん20万。夏のボーナス20万。冬のボーナス20万。

☆77年度に刊行しなければ、あとでは駄目だな。

【4頁】

はじまり

a 馬をもっていなかったから
　自分たちは走った
　ただ幻にのつて

闇のなかから噴き出た

【5頁】

☆「吾は甦なり。生命なり。人を暗きより出さんとして来れり」
（キリスト）

【6頁】

鳥と噴火と川と酒

【7頁】

空白

【8頁】

族長　オサ　は　女性だ

【9頁】

空白

【10頁】

☆全体の物語を考えなくてはならない。
↓
他人への、［■首長や神やへのではなくて］
‖
愛と献身（生ニエ）
の発見とその虐殺の物語。
㊆青森県亀ヶ丘に実~~地に~~地創見旅行へゆくこと。

【11頁】

空白

【表紙】
縄文
長篇詩ノート

1976.5.26

宗左近

ホテル・タカナワ　４４３－９２５１
＃４６４

【表紙裏】
空白

【インデックス】
空白

【インデックス裏】
空白

【1 頁】
☆ 美と倫理が引きさかれる
あたり
悪魔か神らしきものを
むさぼりくらう　■
現場
縄文が　焼かれる
(76年11月9日記)

【2 頁】
長篇詩　縄文
(76年5月20日か)
[A] 構想
まだ、何もない。
(1) サイゴと始りが
それぞれ未来と過去の二つの
闇の■なかのものに
切れている
切れていることによって光るのだ。
② 詩が難しいと、つくづく感じるようになった。しかし、わたしは、ここを乗りきらねば、意味がないのだ。
わたしの世界のなかの　新しい切さきを！
(9月25日記)
☆世界を垂直に貫け！　(全上)
(3) 現代を通してしか引き出せない
始原を！
(しばらく吉田一穂に学んで
4 行前后の詩があってもいい)

【3 頁】
予定　10　(7 月 1 日記)
a.1977年　~~10~~月10日 発行
b.1977年　7月10日 入稿のこと　45
ⓒ1977年　6月30日 完成 ~~430~~篇

少くとも34篇を！
76年　7月 8月　3篇 (4篇?) スミ ~~5編~~
9月　1篇
10月　2篇
11月　2篇
12月　2篇
77年　1月　4篇
2月　4篇
3月　4篇
一三日で作だ
4月10~~8~~篇　~~25~~篇
5月10~~8~~篇　30
6月10~~8~~篇
必ずヤルぞ

北九州市立文学館紀要　第５号
2023年３月31日　発行

編集・発行　北九州市立文学館
北九州市小倉北区城内４番１号
電話　093-571-1505

製　　作　瞬報社写真印刷株式会社

※凡例については、各論考に記しました。
※現在では適切でない表現の見られる資料があります。当時の社会状況を理解するため、そのままとしました。御理解の上、御了承ください。
※本内容の無断複製、転載等の行為を禁じます。

2210138A